

市民の力で核兵器解体 動き出す「クールな反核」

かたやま そら
片山 創
(在米ジャーナリスト)

ロシアの核ロケットを買い取って廃棄しよう。全く

新しい、市民主導型の核兵器廃絶運動が米国で動き出した。非政府組織(NGO)「核兵器廃絶同盟」(<http://www.gndfund.org/>)はロシアで不要になっている核兵器を1基10万ドル(約1090万円)で買い取り廃棄する計画で、ロシア政府と基本合意した。8月にも、史上初の市民による核ミサイル解体が実現する。

廃絶同盟は、国連を舞台にした政府間の核兵器削減交渉の膠着ぶりに失望した反核運動家らが実行力を伴った核兵器削減運動を進めようと団結、6月に結成された。核

廃絶に取り組む科学者の国際組織「バグウォッシュ会議」のロートブラット博士ら3人のノーベル平和賞受賞者、「核戦争防止国際医師会議」など有力な反核団体をはじめ、日本を含む世界中の市長780人も参加している。

計画では、ロシア政府などに解体実費として10万ドルを支払って核兵器を廃棄してもらう。受け取った廃材で製造したプレスレットを販売することで、次の核兵器買い取り費に充てる構想を描いている。ロートブラット博士は「市民の力で核兵器を廃棄できる史上初の運動」と力を込める。さらに、政府の核管理が甘い状態が放置されれば、核テロの危険も高まると警告する。

廃絶同盟の活動拠点は米西海岸



「核兵器廃絶同盟」のホームページ

サンフランシスコ。いかにもカリフォルニアの市民活動らしいのは、セレブ(有名人)を動員して一般市民を巻き込んだ一大運動を狙っていることだ。プレスレットを人気歌手や俳優に着けてもらい、「反核運動はクール(かっこいい)」と盛り上げる。反核に賛同する一般人も、デモ行進には抵抗があるかもしれないが、コーヒーストで1000円程度のプレスレットを購入するだけで「クール」なら、垣根はくつと低い。

廃絶同盟が本格デビューの場として支援するのが、日本の僧侶が終戦60周年を機に計画する平和大行進「核兵器解体ウォーク」だ。長崎の禅僧を中心に宗派を越えて集まる僧侶らは、7月16日にサンフランシスコを出発する。炎天下の砂漠や山を越え、2500キロ離れたニューメキシコ州の核実験場トリニティーサイトに、長崎原爆の日の8月9日に到着する予定だ。廃絶同盟のサイト上で世界中から参加者を募集している。

同実験場は、原爆実験に世界で初めて成功した因縁の施設。日本から運ぶ原爆の火をその誕生地に返し、消すことで、「原爆投下は長崎を最後に」と祈りをささげる。こつこつと負の連鎖を絶つ。今回の大行進を一段と意義深く

しているのは、米国のメディアが並々ならぬ関心を示していることだ。日本人の反核への願いは、これまで市井の米国人に届きにくかったが、今回は違つかもされない。映画「沈黙の戦艦」などで知られるアクションスター、ステイーブン・セガールさんは、行脚の模様を撮影してドキュメンタリー映画を制作すると表明した。

セガールさんは「核兵器を保有する米政府を批判して、『華氏911』のような政治的作品にする意図はない」としたうえで、「平和を思う僧侶たちの真摯な気持ちを伝えることで、核兵器解体のスピードを加速させたい」と意欲を示す。

歌手のライオネル・リッチーさんも、アフリカの飢餓救済を訴えた「We are the world」(1985年)の続編として、核兵器廃絶を呼び掛ける新曲を披露する。出発式には、シュワルツェネッガー州知事や俳優のリチャード・ギアさんも激励に駆け付ける予定だ。

トリニティーサイトで原爆の火を消すシーンは、米ネットワークテレビ局によって世界に放送される。日本人の核根絶への願いに米国人がこれほど注目するだけでも、一つの「事件」と言ってもいいだろう。

